

Title	ゴンクール兄弟『ルネ・モブラン』(第六十~六十五章)(翻訳・最終回)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt Renée Maupérin (chapitres LX–LXV) (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.68 (2019. 3) ,p.82(1)- 69(14)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20190331-0069">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20190331-0069</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ゴンクール兄弟『ルネ・モプラン』

(第六十～六十五章) (翻訳・最終回)

山本武男

これまでのあらすじ

82 (1)

パリ近郊に暮らすブルジョワ家庭の幸福な日々は、儚くも潰え去った。長女アンリエットは婚期に達するや早々に嫁いだが、次女ルネは決して結婚はしないと決意しており、それは父親を理想の男性と看做し恋人の様に慕う、近親相姦的な恋愛感情に由来するものであった。一方、夫の愛に飢え、その反動で息子を自身の英雄の如くに仰ぎ見る母親に育てられた長男アンリは、長じて野心家となり、富と権力を求めて、富豪の家の幼馴染の娘ノエミの母親に戦略的に近付き、その愛人となるも、同時にノエミとも関係し、やがて母親にノエミとの婚姻を認めさせるに至る。ノエミの父親が、娘婚には貴族名があることが条件だとした為、アンリは政治的伝手を頼って途絶えたと思われる貴族の名を名乗る事にも成功したが、その貴族の末裔が生きており、決闘沙汰となり、アンリはあっけなく敗れ去る。この貴族の家に、末裔がまだいるか、

いないかは確かめずに兄が貴族名を名乗る事を知らせたのは、世間知らずで、潔癖な正義感を振りかざす理屈屋のルネであつた。兄の死の遠因を自分が作つたとは人には言い出せず、幼年期からの心臓の病が悪化、ルネを溺愛し続けて来た父親は絶望の淵にありながらも、ノエミの希望を叶えて、彼女が育つた地方の土地に療養に連れて行くなど、出来るだけの事をしてみるのだつた。物語は愈々、大詰めを迎える。ルネの今際のいまわのときわ描写は、『失われた時を求めて』の主人公の祖母の臨終のそれをも想起させ、本作のプルーレストへの影響の可能性も感じさせる。明治の文豪田山花袋が、代表作『田舎教師』を、本作の英訳本を机上に置いて刺激を受けながら執筆したとも告白しており、国際的にも影響力のある名作にして、現代に繋がる核家族の危機をいち早くテーマに取り入れた問題作でもある。本邦初の完訳の連載も、これが最終回。

## 〔翻訳〕

## 六十

ある朝、ルネの部屋に入つて行つたとき、モプラン氏は、寝苦しい夜を過ごして半睡状態の彼女を見出した。父の足音を聞いて娘は目を半分開き、少し顔を向けた。「あら！ パパだったの……」そう言つて彼女は更にはつきりしない声で何か喋っていたが、モプラン氏は旅と云う言葉を何度か聞き取つた。

「旅つて何のことかな？」

「ええ……遠いところから帰つて来たみたいな気がするの……とても遠いところから……どこかの国だったけ

れど、思い出せないの……」

それから目を大きく見開いて、両の手をシーツの上にぺたりと置いて、自分が今さっきまで何処にいて、何処から来たのかを探しあぐねている様子だった。空間と云うのか広がりやと云うのか、ほんやりとした場所、病人が地上から引き離されてゆく最期に近い幾夜かにさまよい、忘却しかかった夢のなかで最初の死の翼がはためいたかのように感じ、果てしなく眩暈がし茫然自失となり、すっかり動転しつつ帰ってくるあの世界、あの辺境の混乱した記憶がうつつすらと回想されていたのである！

「何でもないの」僅かの間があつたあと、彼女は続けた。「阿片よ……昨夜、眠れるように渡されたのよ」  
 考えている事を振り払おうとするような仕草をして言った。「小さい鏡を取ってちょうだい……化粧したいから……上の方にあるやつ……まあ！ 男たちって、何て不器用なんでしょう！……」

痩せて細くなつた手を通してさつと髪の毛を膨らました。乱れていたレースのスカーフを直した。

「さあ……今度は……」彼女が言った。「お話して、あたし、お話が聞きたいの……」

そうして父が語り続ける間、娘は殆ど目を瞑っていた。

「疲れたんじゃないかな、ルネ、なんなら失礼するけど」モブラン氏はそう言ったが、見ると彼女は聞いている風ではなかった。

「大丈夫、ちょっとしんどいだけ……続けて、いい気晴らしになるわ」

「でもパパの話、聞いていないんだらう……なあ、何を考えているんだい、パパの良い子は」

「何にも……探していたの……夢のこと、こんなじゃなかったわ……あれは……思い出せないわ……ああ！」  
 鋭い苦痛が走って彼女は呻いた。

「苦しいのか？」

彼女は返事をしなかった。

モプラン氏も震え、憤怒に満ちた視線を虚空に投げた。

「可哀想なお父さま」少ししてルネが言った。「あたしはね、見ての通り、諦めているのよ……だめよ、そんなに病気を恨んではいけないわ……この苦しみも、何かを分からせる為に与えられたのよ、苦しませる為にのみ苦しませるなんてことはありえないわ」

ときれときれの声で、絶えず息継ぎをしながら、病気の良い面全般、病気が目覚めさせてくれる優しさの源泉、苦洪を受け入れそれを恨まない人に病気が与える繊細な心と優しい性格等に就いて娘は父に話した。病気になる、と、全ての内面の貧しさや卑小さは何処かへ去ってしまう、皮肉な性向は失われ、意地悪な笑いは捨て去られ、他人の一寸した失敗を喜ぶようなことはなくなり、全ての人に対して寛容になれる、そういうことも彼女は父に話した。「機知なんて、今のあたしにはそれがどれだけ馬鹿げたものに見えているか、パパに分かるかしら」と彼女が言った。漸くモプラン氏は彼女が、選ばれて苦痛の中で試練を受けているのだとして感謝の念を抱いているのを理解した。例のエゴイズムや健康であるがゆえに我々を取り巻くあらゆる全ての物質や、五体満足であることから惹起されるあのかたくなさなどに就いて語り、病気になる、と、どれほどこだわり無く解き放たれ、心が軽くなつて、自分への執着を離れて自分自身の存在を味わい得るかを説いた。更に苦痛に就いて論じ、病気は傲慢さを取り除き、人間の弱さを思い出させ、人間らしくさせ、全ての苦難の中にある人に同情を寄せさせ、肉体に慈悲をしっかりと宿らせるのだと語った。

「それに、もし苦しみがなかったら」彼女は付言した。「何か欠けてしまうわ！……悲しむという機会が……」

そう言って彼女は微笑んだ。

「友よ、私たちは大変不幸だ」それから数日たったある夜、小さな二輪の貸馬車から跳び降りてきたばかりのドノワゼルに向つてモブラン氏が言った。「いやあ！ 君が来るんじゃないかという予感がしていたんだ……彼女は眠っている……明日なら彼女と話が出来るだろう。ああ！ あの子の変わり果てた姿を見ることになるな……ところでお腹が空いているでしょう」そう言つて彼は食堂に客を通したが、そこではいそいそと夕食の準備が進んでいた。

「でもですね、モブランさん」ドノワゼルが言った。「彼女は若いですから……あの年齢なら、どんな場合でも可能性があるのでしょう……」

モブラン氏は両肘をテーブルの上に置いたが、彼の頬にはゆつくりと涙が伝つた。

「しかし結局はですね、モブランさん、彼女は医者から見放された訳ではないのですし……まだ希望はあるのですから……」

モブラン氏は頭を振り、返事をせず、泣き続けた。

「彼女は助かる見込みがないというわけではない……」

「そうは言つていても、よくお分かりなんでしょう、あの子に見込みがないつてことが！」モブラン氏は大きな声を出した。「それに、私がそれを口にしたくないのも分かつている筈でしょう！ こういう立場になると、分かるだろう、何に対しても臆病になるのですよ……何だか……口にするとその事が現実にかかるような気がするんですね、あの言葉……あの言葉を声に出せば、娘は死んでしまふんじゃないかと思えてくるのです！ そ

れなら奇跡に期待を掛けたらどうか、それも悪くはないですか？ 医者たちはです、奇跡的に助かるということもありうると私には話しましたがね……おや！ 彼女がまた起きていますぞ。起きただけでも大したものだ……二日前から、快方に向かつているかに見えるのだが……かと思うと一年に二度起きるかどうかといった風にもなるのだから、敵わないですよ！…… ああ！ ひど過ぎますよ！……いや、どうも、食べてください……何も口にされてないじゃないですか」と言つてモプラン氏はドノワゼルの皿に大きな肉片を置いた。「なにはともあれ……男らしくしなくてはいいけませんね……さて……パリでは何か新しい事はありましたか？」

「ありません……特に何も聞いてはいませんが……わたしはビレネーから来たものですから……ダヴァランド夫人があなたからの手紙を一つ読んでくれましたね……でも彼女はルネがそんな重い病気に罹ってしまったなんて信じられないご様子でしたよ……」

「バルースについて、何か話題はないかい？」

「あります……汽車に乗りに行く途中で会いましたね……連れて来ようと思ったのですが……でもご存知でしょ、バルースって人は……世の中何が起るうと、一週間以上はパリを空けたことのない男でして……毎朝、セーヌ河岸の古本屋を見て回るのが彼の日課ですから……しっかりと余白のある版画を一枚でも逃すまいと躍起になっているのですからね……」

「なら、ブルジョ家の人たちはどうですか？」とモプラン氏は訊ねたが、どこか無理している感じだった。

「ブルジョ嬢は相変わらず結婚していないという話ですよ」

「可哀想な子だな！ あの子は息子を愛していたから」

「母親に関しては……もっと悲しい話しかないようですよ、どうやら……恐ろしい結末になりそうです……自堕落、放蕩……狂気、そんな言葉が囁かれておりますが……今、彼女を養老院へ入れることが問題になっている

のです」

六十二

「ルネ」翌日、娘の部屋に入つて来るときモブラン氏が言った。「おまえに会いたいと言う人が下に来ているけど」

「どなたかしら？」と訊きつつ彼女はじつと父親を眺めた。「分かっているわ、ドノワゼルでしょ……パパが知らせたの？」

「そうじゃないよ。彼に会わせてと言わないんだね。会えばおまえは喜ぶかなと思つていたんだが……都合の悪い事でもあるのかな？」

「お母さま、あたしの赤い小さなネッカチーフを取つて……そこにあるから……引き出しの中ね」彼女は父には返事をせずに言った。「彼を怖がらせてもいけないから……」と言うと彼女はネッカチーフをネクタイ風に結んだ。「さあ、彼をすぐに連れてきてちょうだい」

ドノワゼルは部屋に入るとほんやりとした臭気が鼻を突いたが、それは若い病人が発散して籠らせる萎れた花束の色褪せた花のような臭いだった。

「どうもご親切に」彼女は言った。「来てくださつて……ほら、このネッカチーフ、あなたの為に巻いたのよ……これしているときのあたしが、あなたは好きだったでしょ……」

ドノワゼルは彼女の両の手の上に頭を擡もたげ、そこに接吻をした。

「ドノワゼルが来たよ」部屋の奥でモブラン氏は夫人に言った。

モブラン夫人は聞こえていないかのように見えた。それから少しして彼女は立ってドノワゼルのところへ行き、死人のような接吻をすると、彼女がもといた暗い部屋の隅に戻ってしまった。

「それでどうなの！ あたしのこと、どう思つて？ それほど変わつてはいないんじゃない？」更に彼に話す時間を与えずに続けた。「意地悪なパパは、何時もあたしの顔色が悪いって言うんだけど……頑固な人よ！ 快方に向つているんだってあたしが言っているにもかかわらず……だめだつて言い張っているの。見ていなさい、あたしが直つても、パパはあたしが病氣だつて思ったがるに決まつているから……」

すると彼女は、袖口の釦が外れて見えている自分の手首の辺りをドノワゼルが眺めているのに気付いた。

「あら！」と言つて急いで釦を掛け直した。「あたし、ちょっと痩せたでしょ……でも、そんなこと、何でもないの……また太るから……こんなことに就いて、愉快な話があつたけど、パパ、覚えてる？……あの事では、本当に笑つたわ……ブルヴァンヌの農民の、テートヴユイドさんの家でのあの晩餐会で、パパ、あたしが何を話しているか、よく分かつているでしょ？ 想像してみても、ドノワゼル、あのお人よしの人は二年來、あたしたちに質の良いザリガニをご馳走しようと手ぐすねしていたのよ。で、あたしたちがテーブルにつくと、パパが彼に言つたの。「ああ、そうだ！ あなたの娘さんは何処だい？ テートヴユイド。彼女も一緒に夕食を取ると聞いてきたのだが……ここにはいないのかい？」「いや、いますよ、旦那」「それなら！ お出で頂きたいもんですな、さもないとあなたのせつかくのスープに手が付けられませんか」そこで、テートヴユイドさんが席を外すと、やがてあたしたちの所まで、娘さんが話したり、泣いたりしているのが聞こえてきて、そんな事が十五分くらい続いたわ。彼は一人で帰つてきて、あたしたちに言つたの、あの子が出てきたがらないもので……あの子は、自分が痩せすぎているなんて言っているんですよ……ですつて。でも、ねえ、お父さま、あんな風になつてしまつて、ママンはお可哀想よ、ここ二日、この部屋にずっと居つ放しよ……今はこうして看護してくれる人が来

ているのだし、パパ、ママにちょっと外の空気を吸って来るように勧めてみたらどう？」

「ああ！ ルネちゃん」二人だけになるとドノワゼルが言った。「こんな風に君に会えるのが、こんなに陽気な君に再会できるのが、ほくにとつてどれほど嬉しいことか、分からないだろうな！ そうさ！ これは吉兆だ……良くなるよ、ぼくが保証しよう、あの優しいお父さまと、あの可哀想に気を落としているお母さまと、それにドノワゼルという古くからの知り合いで君の許可を得て間借りしているお馬鹿さんの看病があるのだから……」

「あなたもまた、あたしを病人扱いする友人、てこと？……ねえ、あたしを良く見てちょうだい！」

彼女は彼に両の手を差し出したが、それは少々横へ向きを変ええるのを手伝わせて、自分の顔を正面から日の光の下で見てもらう為だった。「今度はあたしが良く見えるでしょ？」

彼女の目や口から微笑が零れた。が、生命の輝きは、仮面であったかのように素早く彼女の表情から落ち去った。

「ご覧の通りよ！ そうなの」声を低くして彼女が言った。「終りのよ、もう長くは持たないわ！……ああ！ それなら明日にでも終りが来てくれたら……もう精魂尽き果てているの、見てお分かりでしょ……やるだけはやったわ……ここでみんなに励まされるのも、もうたくさん……力尽きたの、限界よ……けりを付けてしまいたいわ……パパはあたしをまともに見れやしない、気付いていたでしょ？ あたしが死ぬ前に、パパを駄目には出来ない、この気持ち、分かるわよね！ パパはあたしが笑うのを見ると……あたしが助かる見込みがないのを知っているのに、そんなことは知らない、見ない、思いつかないって態度になるの！ そういうわけよ！ あたしが笑顔でいなくてはならないのは。ああ！ 望んだとおりに去っていける人たち……静かに終りを迎える……」

死ぬ……寛ぎつつ、お気に入りの片隅で、壁に頭を寄せ掛けて……そんなのって素敵よね！ だけど、こんな風にして死んでいくにも、何うってことないわ！……だって、最も苦しいことはもう済んでしまっているんだもの……それに、こうしてあなたもいてくれるし……勇気付けられるわ……あたしが挫けたときには、そこに支えになるあなたがいる……そして、あのときには、あたしが逝くときには……あなたを頼りにしているから……死後数ヶ月はパパの傍にいてあげて……あら！ 泣かないで」彼女は言った。「あたしまで泣きたくなるじゃない」  
僅かに沈黙が流れた。

「兄の埋葬から既に六箇月が過ぎたわ！」ルネが続けた。あたしたち、あの日から一度会ったきりね。あのかきは、あたしがひどい発作に見舞われたんだったわ、覚えてる？」

「うんうん、よく覚えているよ」とドノワゼル。「あのときの情景が結構しばしば蘇って来るんだ……まだ脳裡に焼きついている、君のかわいそうな姿、物凄い苦しさが伝わってくる手振りと、呼びかけようとするのか、喋ろうとするのか、でも一言も発する事が出来なかった君の唇……」

「そう、一言も発する事が出来なかった」ルネはドノワゼルの終りに言った言葉を繰り返した。彼女は目を閉じ、口元には一瞬、祈りに似た眩きが観察された。すると今度は、ドノワゼルを驚かせるような仕合せそうな表情になって彼女は言った。「ああ！ あなたに会えて、あたしは何て仕合せなんでしょう、あなたはあたしの本当の友達よ！……二人でいれば、勇気も湧いてくるの、ご覧の通り……落ち込んでいる連中に、あたしたちで一杯食わせてやりましょうよ！」

## 六十三

噓せ返るほど暑い日だった。宵になつてもルネの部屋の窓は開けた儘になつたので、彼女をひどく怖がらせる蛾を入れないためにランプは点けないままでいた。おしゃべりをしてはいたが、日が沈むに従つて、光のない時間のほんやりとした夢見心地から起る内省的な考えを反映した言葉が漏れ出した。三人ともやがて何も言わなくなり、黙りこくつたまま深く呼吸をしながら夜に身を委ねていた。モブラン氏は娘の手を取つてはまた時々放すばかりであつた。夜間が支配した。部屋中が暗くなつた。長椅子に寝そべっているルネは、その部屋着がほの白く見えているだけだった。やがて何もかも見分けがつかなくなり、夜空と室内が同じくらいに暗くなつた。そのとき、ルネは低い、心に染み入るような声で話し出した。優しい口調だが、言葉ははつきりと聞き取られ、心が籠り、感動の現れたその重々しい言葉は、ときには美しい良心の歌声の様であり、ときには彼女の周囲に天使の慰撫かと思われるものを齎した。彼女の内面は全てを許すことで高まり、時々彼女の発言は地上から遠い、生きとし生けるものたちよりも上位にある存在の耳にまで届いているかのようであり、徐々に暗がりと沈黙と夜と死の厳肅さが織り成す神聖な感じすら漂う或る種の恐怖が部屋に舞い降りると、モブラン氏とその妻とドノワゼルはそこで死に行く者の魂が既に肉体から解き放たれて上昇しつつあるのをその声のなかに感じ取つた。

## 六十四

壁紙には解けかけた花束や、小麦、矢車菊、雛芥子が描かれていた。天井にはいっばいに靄のかかった軽やか

な気配の朝の空が描かれている。窓と戸の間には彫刻の施された木製の祈禱台があつて、綴れ織りのクッションが置かれており、部屋の片隅に親しみの湧く、打ち解けた、慎ましやかな佇まいを形作つていが、その上に置かれた聖ヨハネによるイエスの洗礼が描き出された銅製の聖水盤は逆光になりながら輝いていた。対角線上の隅には、小さな棚が絹製の綱で壁に沿つて吊り下げられていて横にして重ねて積まれた本の背表紙や総クロス製本の英語の本が見えている。蔓性の植物は窓の周りを囲い込み、上部で結んでおり葉の先端は日の光をいっぱいに浴びていたが、その窓の内側の傍には下部が浮き彫り風の模様レースで覆われた化粧台が置かれてあり、その上には銀の蓋の付いた数本の小瓶の間に青いビロードで飾られた鏡が置かれてあつた。暖炉は部屋の隅に突出した形で備え付けられてあり、上に姿見が掛かつていたが、それも化粧台の鏡同様の柔らかいビロードで縁取られていた。姿見の左右にはルネの母親の真珠の首飾りをしたまだ若い頃の細密画の肖像と、それより後年のダゲレオタイプの肖像写真が掛かつていた。上の方にはルネが描いた背広を着た父の肖像画があつたが、部屋中を身を屈めてながら見下ろしているかの様に額縁が傾斜を為して掛かつているのだった。暖炉の前の薔薇の木で出来たサイドテーブルの上には、病人の最後の気紛れを満たした品、マイセン焼の水差しと洗面器が置かれていた。少し離れて、二つ目の窓の傍にはルネが乗馬用のスカートに忍ばせて持ち帰った記念品が掛かつているのだが、それらは移動の行程や狩の際に得た思い出の品々や、ピレネー地方のものも一つ含む数本の鞭、また幾本かの鹿の脚であつたが、それらには青や光沢のある淡紅色のリボンが巻きつけられ、その先に結ばれたカードには獲物を追いつめたときの日と場所とが記されていた。その窓の向うには、士官学校時代に父が用いていた書き物机があり、その引き出しテーブルの上には先の年賀の贈り物の入った籠が数個置かれていた。寝台はモスリンだけで覆われていた。その枕元の、寝台の帳の一方の端の下の方には幼少の頃からルネが持っていたミサの書物が、数珠が掛けられたアルジェリアの棚板の上に並べられていた。その次には整理ダンスが来るのだが、中には数知れない詰

らない代物が詰っているので、小さなままごとの道具、安物ばかり売っている店で買った装身具、福引で当たった玩具から、竈で焼いたパンの耳を用いマッチで四本の脚を付けることで作った動物たちに至るまでがあり、それは少女らの細々した思い出や生活上の些事から成る児戯の小博物館だった。

部屋は照り輝いていた。真昼の日は部屋を暑くし、清澄な光で満たしていた。寝台の隣に祭壇として設えられ、シーツを被せられた小テーブルには二本の蠟燭が置かれ、その炎は黄金色の日の光の中で細かく揺れていた。祈りの間は皆が沈黙していたため、すすり泣きの音が入ったものの、ドアの向うで遠ざかりゆく田舎の司祭の重い足取りが聞こえていた。そして誰も口を開かなかつたが、死にゆく者の周りにいる者たちの涙も突然出なくなり、恰もそれは断末魔の奇跡によって留められたかのようなであった。

二三分で、病気が、病苦の兆<sup>きざ</sup>しやそれに伴う不安が、ルネの痩せこけた顔から消えた。忘我と究極の開放感から美しくなった彼女を前に、父も母も友人も跪いた。天に召されるときの柔和さや心の平安が彼女の上に訪れた。夢でも見ているかのように頭を枕の上で弱々しく仰け反らした。大きく見開き上の方を向いたままの彼女の目は無限によって満たされているかの様で、その視線は少しずつ永遠なるものの不動さを得ていった。

彼女の表情全体からは至福に満ちた憧れ、とでもいったものが立ち現れた。生命の残り香、今際の呼吸<sup>いまわ</sup>が、眠ったまま、半ば開きかけ微笑を湛えた彼女の口もとでそよいでいた。顔は白くなっていた。銀色がかつた青白さは、肌にも額にも艶のない輝きを与えていた。彼女は頭の方から、この世のものとは別の明かりに触れているかのようであり、死が光のように彼女に近付いているといった感じだった。この手の心臓病が齎す変容に於いては、瀕死の者は魂の浄化のうちに最期が訪れるため、若い娘の死相は天に昇った様になるのだった。

## 六十五

遠く旅する者たちは、年によつてはロシア、もしくはエジプトの街や廃墟で、何を観察するとも眺めるともない風で前から歩いて来る年老いた男女の一組と遭遇するかもしれない。モブラン夫妻はそんな姿になっている。あの父親とあの母親がである。二人きりになってしまつて。夫婦に残された子、ルネの姉は産褥で死去していた。彼らは全てを売り払い、そして旅に出た。二人が執着するものはや何もなかった。国から国へ、宿の寢床から宿の寢床へと流れた。根扱くぎにされ、風上に捨てられたもののように彼らは旅した。流滴りゅうてきの地をさまよひ、経巡へめぐり、死から逃れつつも死の影を負ひ、旅路の疲れによつて苦悩くなうが頭こゝろを擡たげたるのを禦ふせぐと努め、命を擦り減らす為に命ある限り世界中の僻地をさすらつた。

(完)

当翻訳は以下に拠つた。Edmond et Jules de Goncourt, *Renée Mauperin*, éd. Nadine Satiat, Flammarion, coll. GF, 1990, p. 250-260.